

美術の窓(143)

インスタ映えと現代美術

大和文華館館長 浅野秀剛

12月1日、「2017ユークキャン新語・流行語大賞」が発表された。年間大賞は「インスタ映え」と「付度」だという。「付度」はともかく、「インスタ映え」と聞いてすぐに、「インスタレーション映え」の略語かなと思って調べたら、「インスタグラム映え」の略語ということであった。やはり、と思う反面、何か気持ちが悪くない。美術館業界でも、「インスタ映え」というのは話題になる。館内の全部または一部を撮影可能にして、あるいは館外に「インスタ映え」するスポットを作り、SNSによる拡散効果を狙う、というのは今や常識かもしれない。果ては、「インスタ映え」する展覧会でないと集客力がない、などと発言する人も稀ではなくなったようである。

同じ12月1日、神戸のメリケンパークで、高さ30メートルのクリスマスツリーを照らすライトアップの試験点灯があったと報じられた。生木のツリーとしては世界最大規模という。その企画が「インスタ映え」を(も?)狙ったものということはすぐに推測できるが、30メートルの生木のツリーは、創造性云々を別にすれば、インスタレーションと言えなくもない。

私が改めて説明することでもないが、インスタレーションとは、現代美術の表現方法のひとつで、室内外のある空間に何かを設置し(映像を映したり音楽を流すこともある)、その場全体を新たに規定し表現することである。空間に合わせて作品を作り(仮設展示)、イベントが終わればそれを除去するのが本来の姿である。昨今の日本は、アートプロジェクト全盛の感があるが、そのなかで最も重要な表現方法がインスタレーションであることに異存はないであろう。

この秋は、あべのハルカス美術館の「北斎-富士を超えて-」展で忙しく、アートプロジェクトにほとんど行くことはできなかったが、大和文華館のある学園前の南エリアで開催された「学園

前アートフェスタ2017」と、大阪の北加賀屋で開催された「Open Storage2017-見せる収蔵庫-」の展示は見ることができた。

「学園前アートフェスタ2017」の中心は、5か所で展示される11作家による現代アート展である。期間は8日間。リーフレットに記載されたジャンルを参考に11作家の作品を分類すると、平面3、立体5、インスタレーション2、ワークショップ1ということになるが、いずれの作家の作品も、展示会場に合わせて展示を工夫(変形)させているので、強引にこじつければすべてインスタレーションといってもいいし、インスタレーションに分類された2作家の作品も、作品や装置を運び出して他の会場に転用することは可能なので、厳密な意味でのインスタレーションではない(終われば取り壊してゼロになる、また、その場以外では全く意味を失うという意味での仮設展示ではない)、とすることもできる。私も実行委員の一人なので、ある程度内実は知っているが、オリジナルのインスタレーションを作家に頼まなかった(頼めなかった)最大の理由は、お金がなかったからと思う。展示期間が終わればゼロになるような作品を作家に頼むとどのくらいの費用がかかるか、皆さんも想像してほしい。

「Open Storage2017-見せる収蔵庫-」は、おおさか創造千鳥財団主催で、開催日時は、11月3日~26日の金土日祝日の12時~18時。曜日と時間を限定したのは、人の手配が大変なのと費用の節約のためと推察できる。約1,000㎡の工場・倉庫跡に開設したMASKは、倉庫であり展示場である。同一の場所で制作・展示し、さらに保管も行うというのは他に例がない。2014年から毎年実施している「Open Storage-見せる収蔵庫-」はそこで行われるインスタレーションである。今年メインアーティスト

は金氏徹平氏で、MASKと、近接する文化住宅跡「千鳥文化」で新作を制作展示していた。MASKでの展示は、大型倉庫の一部で展示が行われているという感覚であった。庫内にある他の作家の作品にも関係性を持たせるということであったが、残念ながら、そこまでのものは見いだせない。珍しい試みではあるが、作品は見せ方が大事で、梱包されている作品、部品、組み立てが完成していない作品の傍らで、新作を見せるというのは、やはりベストな展示とはいえない。ただ、ユニークな試みであることは確かである。金氏がMASKで制作した作品の一部は、そのまま保存、千鳥文化で制作したものも当然の間、そのまま展示される予定という。

「Open Storage2017-見せる収蔵庫-」で掛ける費用は、「学園前アートフェスタ」より一桁多く、為に金氏氏にもある程度の謝礼金を支払うことができるようである。しかし、入館料は無料なので、四つの団体からいただく助成金と主催者ですべての費用を賄うことになる。無料で公開するのはしかたがない面もあるが、多額の費用をかけて、想定観客3,000人というのは何ともつらいものがある。しかし、主催者としては、500円あるいは1,000円いただくと、来館者(参加者)が激減する恐れがあるので、そうする勇気はない、というのが現状であろう。「学園前アートフェスタ」の場合は、来館者からお金を取るということは、最初から想定していない。したがって、何千円かの入場料を取れるアートプロジェクトは、それだけで成功している部類(黒字になっているわけではありませぬ)なのだと思う。

そう考えると、アートプロジェクトで大切なのは、映える作品、映えるインスタレーションであるということになる。つまり「インスタ映えするインスタ」作品である。そ

の結果、お金を取れるようになることが重要なのである。もともと、野外展示など、誰でも見られる場所に展示する場合は、別の集金方法を考える必要がある。「梱包」のインスタレーションで世界的に有名なクリストが、日本でも1991年秋に「アンブレラプロジェクト」を挙行したことを覚えている人は多いであろう。茨城県の稲田で行われ、十億円を超えたといわれるプロジェクトの費用は、クリスト自身の作品を売ることで賄われたという。

私の周囲にも、美術は好きだが、現代美術はどうも、という人が少なくない。そのなかで最も多いのは、誰もやっていない奇抜な手法で誰も見たことのない作品を作る、という姿勢が嫌いという人である。しかし、私に言わせれば、いつの時代でも、歴史に残る作家は、多かれ少なかれそのようにして作品を制作してきたと思う。多少の差はあれ、「誰もやっていない奇抜な手法で誰も見たことのない作品を作る」というのは作家の宿命なのである。できればそれに思想性を絡め、「インスタ映え」する造形になれば無敵である。

そこまで行っても、インスタレーションの作家は、どうやって食べていかうことを常に考えなければいけない。作家は大変なのである。

季刊 美のたより No.201

平成30年 1月 5日

発行 大和文華館